義援金、活動資金へのご支援のお願い

－多くの皆さまからの温かいご支援ご協力に感謝－

◆東北関東大震災義援金へのご協力は

郵便局・ゆうちょ銀行

口座記号番号　００１４０－８－５０７
口座加入者名　日本赤十字社東北関東大震災義援金
取り扱い期間　平成２３年９月３０日（金）まで
その他　（１）郵便局窓口での取り扱いの場合、振替手数料は免除されます。
（２）通信欄に、お名前、ご住所、お電話番号をご記入ください。

◆活動資金へのご協力は

郵便局・ゆうちょ銀行

口座記号番号　０１１１０－０－１１３６
口座加入者名　日本赤十字社兵庫県支部
その他　（１）郵便局窓口での取り扱いの場合、振替手数料は免除されます。
（２）通信欄に、お名前、ご住所、お電話番号をご記入ください。
（３）三井住友銀行でも取り扱いできますので、お問い合わせください。

お問い合わせ　日本赤十字社兵庫県支部　振興課
電話番号０７８（２４１）８９２１

Close-up 赤十字

看護師国家試験

第100回看護師国家試験に全員合格

－姫路赤十字看護専門学校、そしてインドネシア人看護師候補生も－

看護師国家試験に全員合格。学生たちで話し合い被災された方々のためにと義援金を寄付

看護師国家試験に合格したインドネシア人看護師スワルティさん

平成 23 年２月 20 日に行われた看護師国家試験に、３年生 37 名全員が無事合格しました。看護学生の皆さんからは「東北地方で苦しんでおられる被災者の方々のための義援金に、そして災害救護にあたっている赤十字社の活動資金にお役に立ててください。」と、学生同士で話し合い、資金をお寄せいただいています。

また、日本とインドネシアの経済連携協定（ＥＰＡ）に基づき、姫路赤十字病院に平成２１年２月から臨時職員（看護助手）として受け入れていたインドネシア人看護師候補生スワルティさんが、日本赤十字社から受験した看護師候補生として唯一１人、看護師国家試験に合格しました。

スワルティさんは、東北関東大震災について「インドネシアが被災したときも多くの日本人が手伝ってくれた。小さい力だけど、手伝わせてほしい。」とも訴えました。

ひょうごの赤十字　4月号［2011年(平成23年)4月1日発行］

日本赤十字社兵庫県支部

ひょうごの赤十字

2011 4月1日

東北関東大震災で被災された皆さまに
謹んでお見舞いを申しあげます。

日本赤十字社　兵庫県支部
Japanese Red Cross Society
〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通1-4-5
tel. 078-241-9889　fax.078-241-6990
URL　http://www.hyogo.jrc.or.jp/

Contents

東北関東大震災での
日本赤十字社兵庫県支部の取り組み

救護班からの活動報告
●神戸赤十字病院 ●姫路赤十字病院 ●柏原赤十字病院

●本社防災ボランティアセンターを支援
●宮城県赤十字血液センターの支援へ

●義援金、活動資金へのご支援のお願い
Close-up 赤十字
●第100回看護師国家試験に全員合格

兵庫県支部救護班が見たかわり果てた岩手県大槌町の様子

東北関東大震災での
日本赤十字社兵庫県支部の取り組み

東北地方太平洋沖地震が発生！
神戸赤十字病院の救護班13名が第一陣として緊急出動

－甚大な地震･津波災害が東北関東地方の太平洋沿岸を襲う－

平成 23 年 3 月 11 日、14 時 46 分頃、東北地方太平洋沖を震源とするマグニチュード 9. 0 の巨大地震が発生。

この地震による大津波が東北地方から関東地方の太平洋沿岸を襲い、未曾有の被害が発生しているとの情報を得て、兵庫県支部では、 3 月 11 日 15 時 00 分、支部内に「災害救護対策本部」を設置。

広域災害等に備えて編成し、常に訓練を重ねてきた姫路、神戸、柏原、多可の各赤十字病院の救護班・DMAT（災害派遣医療チーム）に出動待機を指示。

同日 18 時 35 分、神戸赤十字病院の救護班及び支部職員（医師､看護師（こころのケア要員 1 名を含む。）及び主事）が、第一陣として被災地、岩手県に向け出動した。

被災状況や道路状況を確認しながら陸路で被災地に向かう神戸赤十字病院の救護班は、出動から約 20 時間を要して、翌 12 日 15 時 04 分に参集場所の盛岡赤十字病院に到着。

到着後ただちに、被災情報収集を行うとともに、岩手県支部を通して災害対策本部等と活動場所等の調整を行い、13 日 13 時 36 分、釜石市教育センター横の鈴子広場を活動拠点と定め、さっそく車中で被災者の治療、診療を行いながら、エアーテントによる仮設診療所の開設準備を開始。

仮設診療所では、余震が続き、津波警報が幾度も発令される中、一時退避を繰り返し、いつまた津波が襲ってくるとも知れない不安と恐怖と闘いながら 24 時間体制で診療を行いました。

また、仮設診療所での被災者受けれを継続しながら、14 日からは避難所となっている大平中学校、大平集会所、市民交流センターなどへの巡回診療やこころのケアにもあたりました。

被災地に向け緊急出動する
神戸赤十字病院の救護班

鈴子広場に設置したエアーテントの
仮設診療所

雪が降る厳しい寒さの中で昼夜を問わず
行われる診療

体調不良を訴える被災者の診療にあたる
兵庫県支部の救護班

巡回診療する神戸赤十字病院の救護班 (大平集会所)

続いて姫路･柏原赤十字病院の救護班が被災地へ

－仮設診療所や巡回診療に続々と訪れる被災者の皆さん－

第二陣の姫路赤十字病院の救護班７名（医師、看護師等。支部職員を含む。）は、3 月 14 日 16 時 20 分、釜石市教育センターに向け、医薬品、燃料、食料などの補充品を搭載して、陸路で出発。翌 15 日 13 時 46 分、現地、仮設診療所に到着。

続いて、同二陣の柏原赤十字病院の救護班６名（医師、看護師等）は、15 日 13 時 35 分に伊丹空港から、一路、空路で秋田空港をめざし、20 時 00 分に現地に到着。姫路、柏原赤十字病院の救護班が合流して 24 時間体制での治療、診療を開始しました。

15 日からは、被災地の天候が雪へと変わり、厳しい寒さの中での救護活動ともなりました。

発熱や嘔吐などの症状がみられる被災者で診療受付が込み合いましたが、急患や急激な発熱、嘔吐下痢などの症状がみられる小児の診察を優先することで、仮設診療所の秩序を保っています。

また、翌 16 日、姫路赤十字病院の救護班は、被害が甚大な大槌町の避難所（県立大槌高等学校など）への巡回診療にもあたり、診療所開設のアナウンスに体調不良を訴える大勢の被災者の皆さんが訪れ、列をつくる中、100 名以上の診察にあたりました。

3 月 30 日現在で、兵庫県支部では延べ８班 70 名の救護班を被災地・釜石市に派遣するとともに、日本赤十字社全体では延べ 355 班（全国）の救護班を各被災地に派遣し、被災者救護にあたっています。

◎兵庫県支部救護班の活動状況

派遣期間	班員数	所　属	班員の内訳
3月 11 ～ 15 日	13 名	神戸赤十字病院・兵庫県支部	医　　師　15 名 看 護 師　23 名 薬 剤 師　6名 検査技師等　4名 連絡調整員　22 名 ※ こころのケア 要員6名を含む。
3月 14 ～ 17 日	7名	姫路赤十字病院・兵庫県支部	
3月 15 ～ 17 日	6名	柏原赤十字病院	
3月 17 ～ 21 日	12 名	神戸赤十字病院・兵庫県支部	
3月 21 ～ 24 日	10 名	神戸赤十字病院・兵庫県支部 多可赤十字病院	
3月 24 ～ 28 日	8名	姫路赤十字病院・兵庫県支部	
3月 28 ～4月1日	14 名	神戸赤十字病院・兵庫県支部	
計　70 名			70 名

巡回診療の受診に列をつくる被災者の
皆さん（岩手県立大槌高等学校）

24 時間体制で治療、診療にあたる
柏原赤十字病院の救護班

仮設診療所で被災者を診る
姫路赤十字病院の救護班

一刻もはやく救援物資を被災者の皆さんのもとへ

－毛布、緊急セットを緊急搬送－

被災地では、厳しい寒さの中、多くの被災者の皆さんが着の身着のままで避難されています。

そこで、兵庫県支部では、災害が発生した翌 12 日、当支部と柏原赤十字病院に備蓄の毛布 1,190 枚を、日本赤十字社近畿ブロックでとりまとめを行っている高槻赤十字病院に緊急搬送。近畿ブロックでとりまとめられた毛布 10,000 枚は、宮城県名取市役所、岩沼市役所へ向け搬送されています。このほか、携帯ラジオ、懐中電灯などが入った緊急セット 996 セット、安眠セット 350 セットを高槻赤十字病院に搬送。

3 月 30 日現在で、兵庫県支部を含め全国の日本赤十字社各都道府県支部から被災地に届けられた救援物資は､毛布 125,000 枚超､緊急セット 25,000 セット超、安眠セット 11,000 セットとなっています。

高槻赤十字病院から被災地に届けられる
救援物資

東北関東大震災
災害報告

救護班からの活動報告

神戸赤十字病院

医　師　　戸田　一潔

　避難所では、医療もともかく連絡が外部とつながらない、取り残された不安感が大きく、日赤の医療班が来てくれたことについては純粋に喜ばれていた。
　特に、神戸からということで同じ被災経験を持つ方々と初対面でありながら気持ちを共有している感じをいただけた。これは中越地震でも感じたことであり、自分たちの責任と誇りを、同時にいつも感じるところである。
　これまでの急性期、慢性期の救護とはまったく異なる処方が求められることを感じ、糖尿病や高血圧、抗凝固剤の手配にあたり補充確保にあたってくれた山岸さん、携帯電話や無線が山間部であるため使用困難な状況にあったところをさまざまな方法を駆使して情報発信してくれた岡田さん、大槌町へ救護班がまったく入れていないことがわかり、大槌町を含めた釜石地区の惨状を伝え継続的な救護活動につなげた浅田さん、津波警報が繰り返し発令される中、すべてのスタッフの士気を高め、自らは危険地域に残り、陣頭指揮をとってくれた葛嶋看護師長、初めての派遣だと後で聞いたが、それをまったく感じさせない働きで、淡々と任務をこなしてくれた久貝さん、救護所設営を淡々と進め、その上中越地震でも問題になったエコノミークラスシンドロームについての啓蒙と予防の体操を伝え、避難所での普及に努めてくれた髙本さん、20 時間ノンストップのトラック運転や仮設診療所のテント崩壊という非常事態を乗り越えるという大きな仕事をしてくれた沖野さん、機能していない地元災害対策本部と民生委員と日赤の間を根気強く調整し、巡回診療の形を作るとともに、釜石地区には報道されていない避難所があり、そこに多くの被災者がいることを全国に発信するきっかけをつくってくれた上江さん、これまでのトリアージから治療といった流れでないことを感じ、円滑な救護活動が行えるよう救護所内部の配置を自身の考えで行った横山さん、常に回りの雰囲気を明るくしてくれ、そして何としても早期からこころのケアを立ち上げるという執念の火を消さず、連日の極寒のテント宿泊でも熱い気持ちを持ち続け実践した菊川さん、通信手段がない中、何とか外部との連絡を考えてくれたほか、国際報道のロイターなどとも得意の英語で折衝してくれた北村さん、そして大槌町から逃れてきた人を偶然発見したことから始まり、その聴取から町の被害の程度の大きさに気づいてくれ、救護班を分けてでも大槌町の救護にあたるべきだと訴えた安部さん。

一刻も早く被災者を救護するため情報収集や連絡調整を行う戸田医師

　われわれの恩返しともいえる救護活動を長く行うことが、神戸赤十字病院の責務であると痛感している。神戸、神戸、神戸だからできること。神戸でしかできないことがたくさん、たくさんあると確信して戻ってきました。
　被災経験のある病院、日赤支部は、全国から見れば本当に限られています。
　その後の復興、支援体制を 16 年の歳月をかけて構築してきたのは、神戸日赤であり、兵庫県支部だけです。全国のリーダーとして、これからもその姿勢が全国から注目されると思っています。

看護師長　　葛嶋　元子

　避難所では、乳児から高齢者までと幅広い方々が避難されており、若い世代の人たちが中心となり、炊き出しや泥の中から食料を探し出して調理するなど、食の確保を行っていた。
　この地域の避難所には、行政、自衛隊、医療者、ボランティアなど全く介入のない状態であり、地域の人々が助け合い、支えあっていた。
　初動班として仮設診療所の設置を行い、13 ～ 15 日まで約 100 名の診療を実施。また、釜石駅周辺の巡回診療も行い、避難所での被災者ニーズの把握や情報提供、こころのケアの導入を図った。被災者の中には、車中泊の人も多く、災害発生後、３日目には身体の不調を訴え、エコノミー症候群のリスクが高い状態の方もおられた。私たちの姿を見るなり泣き出す被災者もおられ、「同じ震災で被災を受けた神戸の人たちがいち早くこの釜石に来てくれた。」「遠いところからわざわざ来てくれた。」と感謝の声も聞かれた。

神戸赤十字病院の救護班

　また、班長補佐として、常に救護班員の安全が念頭にあり、大災害時の自己の役割責任の重さを痛切に感じた。
　声をかけ合い、助け合いながら初動班の使命を全うしようとする個々の役割意識の高さ、チームワークのすばらしさを感じた。良きチームに出会えたことに感謝したい。

　被災者と接していくうちに、被災者の方々には「神戸」「赤十字」というこの２文字が心の安寧につながっているのではないかとも感じた。今後は、こころのケアが重要視される。
　私たちが被災地に行くこと、また被災者の皆さんと会うことで、少しでもこころの中の灯りがともればと思う。

姫路赤十字病院

医　師　　渡邊　貴紀

　釜石市教育センター横に設置の仮設診療所の数百メートル先より沿岸部は、壊滅的な被害状況で、電気、水道、ガス等のライフラインはいずれもまだ復旧していなかった。
　姫路赤十字病院の救護班は、仮設診療所での診療と岩手県立大槌高等学校への巡回診療を行ったが、大槌高等学校では診療所開設のアナウンスとともに大勢の被災者が訪れた。
　まだ、震災後、間もない時期であり、被災者の皆さんは気が張っている様に見えた。寒い時期であり、今後、長期の避難生活が予想されるため、体調管理に関する不安の声があった。
　われわれが救護活動を行った場所だけでも、現在の人員では手が足りないほどの医療ニーズがあったが、まだまだ訪問できなかった避難所が数多くあることを考えると、被災地ではもっと多くの医療支援が必要であると感じた。

巡回診療で診察にあたる渡邊医師

看護師　　石原　里美

　釜石市教育センターの数百メートル先まで津波が押し寄せ、すべてのものを押し流していた。道路が寸断されているため、どこにどれだけの人が避難されているのか、支援、巡回診療がどこまでいきわたっているのか把握が困難な状況だった。
　釜石市教育センターの仮設診療所と県立大槌高等学校・交流センターでの診療介助を行ったが、ほどんどの人が、高血圧、糖尿病、喘息、狭心症、甲状腺機能低下症、脳梗塞等の持病の内服薬の処方希望で診療に来られ、高血圧の方が圧倒的に多かった。このほか、切傷の消毒、包交なども行った。
　被災者の皆さんからは、今度はいつ巡回に来てくれるのか、明日も来てくれるのかと尋ねられることが多くあった。津波で自宅を失ったことや、自身が津波でさらわれたときの状況を淡々と話されているのが印象的だった。
　また、自らも被災者である医師、看護師が、自分のことを後にして被災者のために救護していることに心打たれた。医療者だけではなく被災に遭いながらも救護活動を行っている人たちがたくさんいる。こういった人たちへのこころのケア、支援も今後必要になってくると感じた。
　たくさんの被災者の方々が診察に来られたが、診察を回すことが精一杯で、ゆっくりと被災者の方々の訴えに耳を傾けられなかったのが心残りである。
　今回の災害救護活動は、私自身にとって初めての経験であり、災害救護経験のない自分が行って本当に大丈夫なのか、という不安が大きかった。だが、被災者の方々から「ご苦労さまです。」「ありがとう！」という言葉をたくさんかけてもらい、その言葉が私自身の励みになった。この経験を大事にしていきたい。

看護師　　大前　宏之

　大槌高等学校で、大槌病院と岩手医大の医師が臨時の診療所をつくり、診療にあたっていたため、大槌病院の医師、看護師と交替し、被災者の皆さんの診療を行った。
　薬が流されてしまったため薬の処方を希望する方々が大半であったが、中には腸炎やインフルエンザを疑う症状の方もおられ、今後、感染拡大しないかが心配である。

姫路赤十字病院の救護班

柏原赤十字病院

医　師　　蓮尾　直輝

15 日、出発直前では釜石市の死者、行方不明者などに関する詳細な情報はなく、現地での非常状況把握が十分でないことが伺われた。

20 時 30 分頃、現地に到着したが周囲は真っ暗で現地のライフラインはすべて遮断されており、仮設診療所と災害対策本部の発電照明が唯一の明かりであった。翌 16 日に、仮設診療所から港側への道路が開通したとの情報を受け、受診者が途切れた 17 日早朝に周辺を視察した。仮設診療所の 500 m先には津波で流された車や瓦礫が散乱し、見渡す限り壮絶な戦場といった印象で、かろうじて残った大型倉庫などの建造物も大きく変形し、すべての物が無力化された絶望感に包まれた。

3 月 16 日朝 7 時から翌 17 日の朝 7 時までの 24 時間体制で、釜石市教育センター横に設置した仮設診療所で診療を行った。7 時から 13 時までは、近隣避難所から徒歩または車で乗りあって受診される被災者が常におられる状態で、ほとんど休みなしに診療を行った。7 ～ 8 割の受診者は内科的な内服薬の継続処方を希望される方々で、緊急性を認める患者は 1 割程度であった。13 時 30 分の時点で受付が込み合い、パニックを避けるために一旦受付を中断して急患のみの受付にした。この間も、発熱、嘔吐などの患者に対しては随時診療を行った。日中には体感できるレベルの余震が幾度となくあり、大きな余震の後に津波警報が発令され、診療していた被災者の皆さんとともに全員退去する騒ぎもあった。

夜間は、周囲が真っ暗。2 ～ 3 名の受診者がおられ、急激な発熱、嘔吐下痢など小児が中心であった。午前 4 時頃には、仮設診療所内の電源が突然落ちたことから、約 30 分間はヘッドライトと懐中電灯で診療を行った。

仮設診療所で昼夜を問わず治療、診療にあたる蓮尾医師

被災者のほとんどが家族、住居のいずれかを失っており、その精神的ショックは計り知れない。中には、「家族がいる自宅が流されているのを見ているしかなかった。」「さっきまで一緒に走って逃げていた人が背後で波に浚われた。」といった壮絶な体験も耳にした。中には、「神戸の震災のときには他人事のように感じて何もしなかったが、いざ自分の身に降りかかってくるとこうやって助けてくれる人々がいることが有難い。」と、改めて災害救護活動の重要性やボランティア精神の尊さを口にする人もいた。

地元神戸が被災して、そして生き残ったわれわれが体験したこと、感じていたことを釜石の人々は今まさに体験しており、その実体験に基づく援助を心がけた。

看護師長　　杉上　恭子

釜石市教育センター横に設置した仮設診療所で、診療活動を 24 時間体制で行った。体調不良の方、薬のない方、けがをした方が診察に来られ処置を行った。

また、待ち時間には話を聞かせていただきながら精神的な面にも触れた。

まだ、現実が受け止められていないのか、周りの人たちもみんなが同じ境遇であるからなのか、不思議なくらいに落ち着いておられた。

被害の状況を淡々と語り、身内の消息が絶っていることを「また見つかると思う。」と話される。

着の身着のままで逃げ出しておられるので、靴下をはいていない方もおられた。爪の中には土が入って黒くなっているが手を洗うこともできず、服も汚れたままであった。食事も水も充分にあたっておらず、おにぎりだけという方もいた。暖房がないため与えられた毛布と人とが寄り添うことにより暖をとっている、と話された。

夜になると、恐怖で不眠になっている人や地震酔いの症状の方もいた。いつまで続くかわからない避難所生活に、体力的に、精神的に耐えることができるのだろうかと被災者の皆さんは不安を持っておられた。

柏原赤十字病院の救護班

周りの援助を必要としながらも、自分たちの生活を作り出そうとしている動きも各避難所単位である、と聞いた。人々は、苦境を乗り越えようと前向きに進んでいる。また、一方では現実を受け止めなければならない状況にあり、かなりの精神的ダメージを受けていくことにもなる。時間の経過とともに、こころのケアが必要になってくると思われる。

東北関東大震災
災害支援

本社防災ボランティアセンターを支援

－被災者の皆さんを側面からサポート－

ひとたび災害がおこると、ボランティアの皆さんからの支援は欠かすことができません。

しかし、2次災害の可能性をはじめ被災地までの往復の交通手段、被災地の状況や避難所情報、被災者ニーズなどの情報があまりに乏しく、多数のボランティアの皆さんは、なかなか被災地入りすることができませんでした。

時々刻々と情報が明らかになってくる中、3月 19 日から同月 21 日までの間、兵庫県支部から赤十字防災ボランティアの中島　健治リーダーが、日本赤十字社（東京都）で、本社防災ボランティアセンターを支援。

中島リーダーは、ボランティアセンターの業務について、これをしてくださいという指示がない中、常に情報管理に細心の注意を払いながら、自分で考え行動し、被災地、宮城県ボランティアセンターとの連絡調整や、島根県支部から現地に入ったボランティアの帰路シャトル便の手配をはじめ、沖縄県のボランティアに現在の状況を伝え悲被災地入り待機の指示、千葉県から宮城県に入った車輌事故の連絡調整などの支援にあたりました。

本社に設置された防災ボランティアセンター

宮城県赤十字血液センターの支援へ

－患者さんのもとに安定的に血液製剤をお届けするために－

宮城県赤十字血液センターでは、ライフラインの寸断や献血バスや献血ルームでの採血業務が中止となったことに伴い、復旧作業に追われています。

そこで、医療機関に向けて血液製剤の供給業務が逼迫していることから支援を行うこととなりました。

近畿の血液センターに対して 4 名の支援員要請があり、兵庫県赤十字血液センターでは、3 月 17 日から 4 月 3 日までの間、4 泊 5 日の日程で延べ 4 名を支援要員として宮城県赤十字血液センターに派遣しています。

宮城県の支援に向かう
血液センター職員